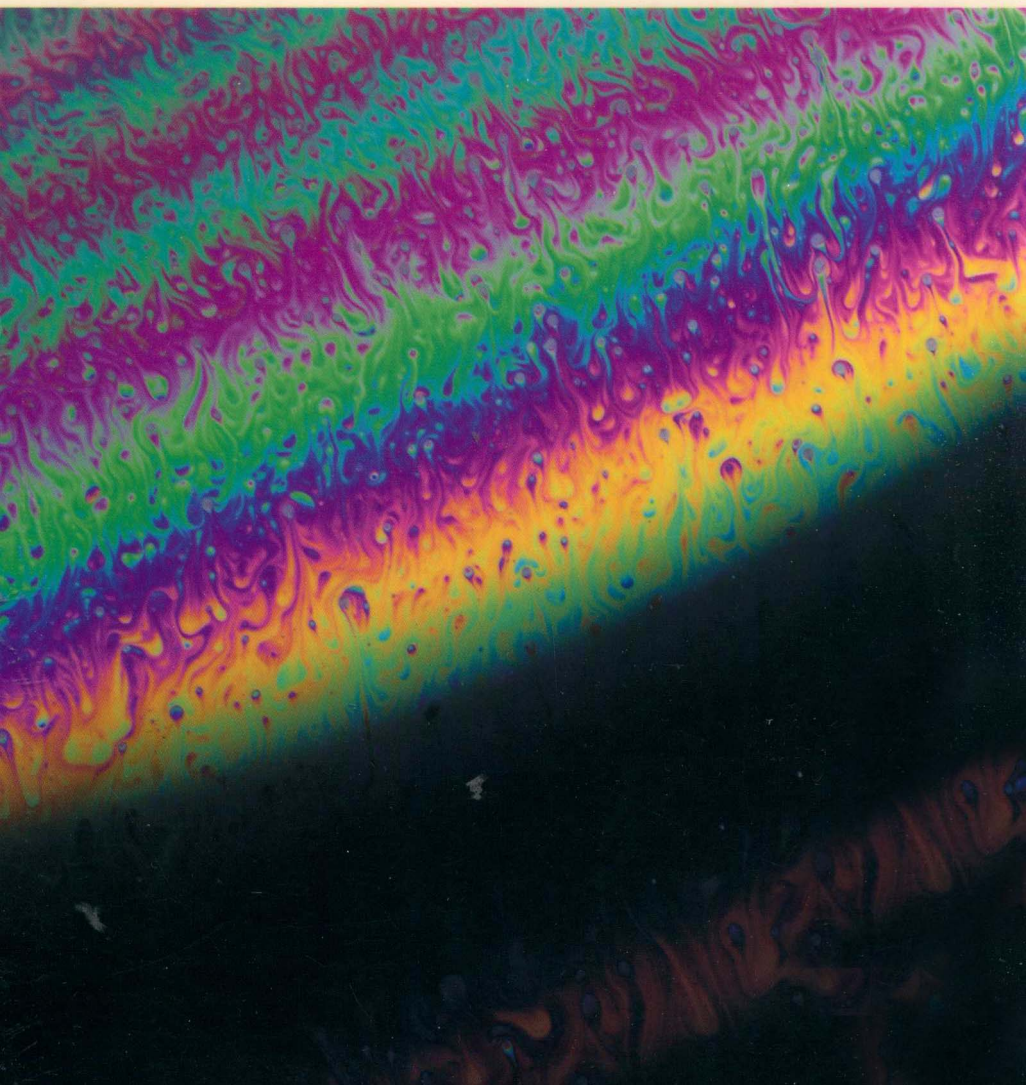


恐ろしい時代の幕あけ ドラマと人間

早坂暁

岩波ブックレット
NO.196



おもしろいといえはおもしろい。悲しいといえは悲しい。

自分の死期を知ったのと同じです。

人類が自分の死期をわかったわけです。おまえはガンだよといわれたのと同じような時間をいま迎えているのです。

（本稿は「わらび座と文化運動を考える会」主催の公開講座（一九九〇年八月二二日）での講演に、加筆していただいたものである——編集部）

恐ろしい時代の幕あけ

ドラマと人間

早 坂 暁

せっぱつまった状況

人間を描くむずかしさ

人間の画期

家族の崩壊

恐ろしい時代の幕あけ

表紙デザイン＝西垣 隆一 監戸 勇

岩波ブックレット No.196

せっぱつまった状況

広島に行ってきました。八月六日の原爆投下の日です。毎年行きます。

今年はほんとに恐ろしい暑さで、目もくらまんばかりの暑さでした。その前の週は沖縄へ行っていたのですが、これまたすさまじい暑さでした。この地球はだんだん暑くなっているのだそうです。人間のいり卵、日本列島のいり卵をつくるのではないかというような暑さです。東京で気温が二度上がっているのだそうです。二度上がっているということは、東京が鹿児島になったということです。

ある植物学者の先生は、二一世紀になって早々に、東京ではケヤキ(榎)をみるのがなくなるだろうという。ぼくは東京の渋谷区に住んでいます、区木というのをそれぞれ決めていまして、渋谷区の木はケヤキです。でも、二一世紀になるとケヤキはなくなる。動物はわりと気温に対応することができるのですが、植物は温度にも対応力がなくて、このまま温度がいまの状況で上がりつづけると、二一世紀の早々にケヤキは東京では全滅してしまふ。もうケヤキをみることはな

くなってしまうというのです。

そうなると、渋谷区では区木を替えなければいけません。夾竹桃とか、さも暑さに強い木に替えて、おそらく「ここにケヤキありき」なんて碑を立てたりして、まことに恐ろしい話ですが、そういう時代がくるかもしれません。

ぼくはいろいろなドラマを書いています、ドラマというのは、いかにしてあるせっぱつまった状況をつくり出すかということ、平たくいうとそういうことです。せっぱつまった状況をつくって、そこで人間がどのように動き、どのように「反応し」、どのように喜び、どのように悲しむか、そういうものをつくって見せるのがドラマだと思います。

ふつうの状態では、人間の対応、考えかたや動きかたは、ほとんどの人がそう変わりません。「こんにちは」といわれたときに、いきなり殴るといのは、まず頭がおかしくなにかぎりはありません。ふつうの人間は「こんにちは」といわれて、いきなり殴ってしまうということはまずない。

ところが、あるせっぱつまった状況に、つまり一種の圧力釜みたいな状況にかけますと、一つのことばで殴りかかったり、殺したりという状況になってきます。人間の行動のベクトルが、その人によって予想しがたく変化して、一定の方向へ向かないわけです。そういうことを描き出すのがドラマの世界です。

ひじょうに平たい話ですが、愛し合った二人がいたとして、片方に愛情がなくなったとします。たとえば男のほうに愛情をなくしたときに、果して男は女を捨てるかどうか。また、どういう捨てかたをするか、またどういう捨てかたもできないかどうか、せつばつまったところでの反応は、人によってもものすごくちがいます。そういう圧力釜の状況を見せるために、ぼくは高圧力の世界をさまざまに作りだしてドラマを書いているのです。

ガンと宣告されて

しかし、なかなかせつばつまった状況というのは、頭のなかで考えていてもわからないことが多いのです。ぼくは一〇年ほど前に病気をしました。胆石と心筋梗塞が同時にやってきたのです。それも旅先での発病で、這うようにして帰京して東京の大きな病院に入院しました。心臓はすでに三分の一が壊死^{えし}しており、心臓バイパス手術をすることになった。

ところが、心臓の手術をする前に、ぼくの胆石が胆嚢ガンだということがわかったのです。ぼくは大学の途中までは医学部だったものですから、担当の医者がそういう点を過大に考えたのでしょう。あなたは胆嚢ガンだと、ちゃんと言ってくれました。そうでなくても、心筋梗塞だけでひじょうに驚いているのに、その上ガンだといわれたのです。いつてみれば、ガンが登場してくると、横綱が出てきた感じですね。心筋梗塞というのはじつは大関だったのかというような、そ

んな感じですよ。

心臓バイパス手術は直ちに中止。ガン患者の心臓を手術してもはじまらないというのです。たしかにそうかもしれません。

それで、まず胆嚢ガンの手術を先にするようになりました。心筋梗塞で心臓が三分の一は死んでいるわけですから、手術の途中で全部とまってしまうかも知からない。

で、心臓外科のチームもつくって、心臓がとまったらすぐに心臓外科のほうへバトンタッチできるように、二チーム組むことになったものですから、なかなか二チームのスケジュールなどが合わなくて、一カ月近く手術を待つことになったのです。

それまで、ぼく自身、自分の性格はすごく陰気な人間だと思っていました。「夢千代日記」の冬の日本海みたいな、陰気な暗い性格の人間だと思っていたのです。ところが、ガンだといわれて手術を待っているなかで、意外に自分が陰気な人間ではないということが、だんだんわかってきました。むしろ陽気な、フージーな、楽天的な人間だということがはじめてわかりました。そのときは五〇歳のときだったのですが、五〇年間も自分はちょっと陰気だな、暗い性格だな、ネクラだなと思っていたのが、はじめてぎりぎりの土壇場にせっぱつまってみて、やっと自分の性格がわかったということです。

ですから、土壇場になってみないと、なかなか自分の性格すらも、わからないのです。

胆嚢は肝臓のそばにあるものですから、胆嚢ガンがひじょうに危険なガンであるのは承知していました。ところが、あなたは何を食べてもいいですよ、といわれた。これは、ガンだといわれたときよりも、そのほうがショックだった。

というのは、大きな大学病院で、何を食べてもいいというのは、治療を放棄したということですよ。まだ治療の可能性のあるあいだは、これを食べなさい、あれを食べてはいけないとか、いろいろうるさいのですが、何を食べてもいいというのは、もうあなたは治療の方法がないといっているのと同じです。ぼくはガンだといわれたときよりも、何を食べてもいいといわれたときのほうがショックでした。

一ステージ、二ステージと、ガンの進行パターンは五つまであるわけですが、ぼくは、自分の状態は五ステージまでいっているんだな、末期ガンになっているんだなと悟りました。ひじょうにショックでしたが、しかし、何を食べてもいいというのなら、よし食べてやろうと思ひまして、ホームプレートを買ひ、いちばん高い肉を買ひてきてもらひて、幸ひ個室だったものですから、病室でジュージュー焼ひて食べました。良いにおいがブーンと病室から漏れていく。そうすると、近くの入院患者さんたちが、のぞくのです。

「あ、早坂さん、すごいものを食べていますね。いいんですか？」

「ええ、いいんです。ぼくはいいんだそうです」

と、幾分ヤケクソ気味です。

「ははあ、うらやましいですねえ」

次はうなぎをとったり、トロの刺身を買ってきたりして食べに食べていました。

人間に生まれた幸運

そのうちに、外泊をしないのだったら外出していいですよという。これも死ぬ前だから何でもみていらっしやいということでしょう。

……どうですか、みなさんがそうなったと仮定して、どこに行かれますか。一泊とか二泊ではなくて、その日のうちに、夕方までに帰ってこなければいけない。ぼくの場合は映画、演劇、そういうものはいっさいみる気がしませんでした。それは自分の仕事に近いものですから、そういうものをみると、もっと書きたかった、こういうものをしてやってみたかったと、すごく無念な気がするのです。ですから、劇場関係は近寄るのもいやでした。

なかなか行く場所が決まらなかったのですが、そうだ、こういうときは音楽でも聞こうと思いました。それもベートーヴェンとか、きつい音楽はやめよう。からだがだめなのだから、気持ちもだいぶへばっているのだから、ビバルディのような柔らかい、やさしい曲がいい。運よくビバルディの「四季」をやっているところがありまして、出かけていったのです。

そのときに、私自身にも予想もつかなかったようなことが、起こったのです。ビバルディの曲がフワッとやさしくはじまりました。はじまって間もなく、不意にあきれるばかりの涙がワッと出てきた。とたんに、鳴咽^{おとげ}がおさえられない。オ、オ、オ、オッと泣きだしてしまったのです。これはいけないと、必死におさえるのですが、涙も、鳴咽も止まらない。まわりの人はびっくりしている。私は急いでロビーへ出ました。

ともかく気持ちを落ち着けてからと思うのですが、なかなか落ち着けません。少ししたら、やっと収まったのですが、会場に入ったら、また鳴咽がこみあげるような気がして入れませんでした。結局そのまま帰ったのですが、おそらくあのやさしい音楽で、おさえていた感情が一気に、パンドラの箱が開いたように噴きだしてきたのでしょう。……ほんとうに自分がそんなになるとは思いませんでした。

それで、音楽もだめとわかった。じゃ、陶器を見ようと考えた。とくに私は李朝の青磁みたいなのが好きなのです。あれをみるとすごく気持ちが落ち着くからと考えて、ちょうど李朝の青磁の展覧会があったので、あれなら泣くことはないだろう、音楽ではないわけだからと、出かけました。

ところが、途中で足がとまってしまいました。なんかとても自分はひどいことを仕でかしそうな気がする……。ものすごく美しい青磁の壺を割ったりするのはないか。自分は不当に死んで

しまうのだという破滅的な気持で、貴重な壺を割ってしまったのではないか……。

そう思うと、ものすごく怖くなりました、もう会場へ入れなくてトボトボと帰ってきました。

結局ぼくが行ったのは水族館でした。池袋のサンシャインというビルのなかに小さな水族館がある。ここが非常によかったです。すごく気持ちが悪くなりました。入ったらすぐに、アジが何百匹も訳もなくぐるぐる泳いでいる。バカみたいに——バカみたいにとっては失礼ですね。あきることなく泳いでいる。だれかリーダーがいるのかなと思うのですが、わからない。ともかく泳いでいる。一瞬もとまらない。そういうのをぼんやりみていますと、すごく気持ちが落ち着いてきました。

もつとなかへ入りますと、いろいろな変わった魚がいる。そのなかにタカアシガニタカアシガニというのがあります。ひどく足が長いカニ、いちばん大きな水槽のなかに一〇匹ぐらい。脚立きやたつのように足を踏んばって立っている。少しも動きませんから、置物かなと思った。トントンとガラスを叩いてもぜんぜん動かない。ずうっとみていると、ちょっと目が動いたりする。ほんのちょっと足を動かしたりする。ああ、これは生きているんだとわかった。本当にタカアシガニはジーツとして、ほとんど動かない。よく見ると小さな口だけは忙しく動いています。水中のミジンコみたいなものを食べているんでしょう。あとはもう置物みたいになっている。彼らをみていますと、すごく気が落ち着いてきました。

なぜそういうものをみて、死ぬ間際になった人間の気持ちが悪く落ち着くのだろうかといういろいろ考えたけれども、わからなかった。いまだによくわかりません。

しかし、たとえばこういう言いかたもあります。このタカアシガニをみる、これは一日に一メートルも動かない。こういうタカアシガニに比べて、自分はほんとうに、よく動き、よくしゃべり、よく歌い、よく泣き、よく笑い、よく怒り、実にたくさんさんの表現をしてきた。このカニに比べれば自分は何万倍の表現ができて、なんて幸運だったのだろうか……。

考えてみれば、人間というのは、この地球上の生物のなかでいちばん表現をする生き物です。移動し、笑い、歌い、絵も描き、芝居までしてしまふ。芝居までしてしまふといっぺんはいけない。カニだって芝居するのもわかりません。ぼくらがわからないだけで、アジの世界だって、俳優のアジがいて、ア・ジ・テ・シ・ョ・ンみたいなことをやっているのかもわからない。

しかし、ぼくらがわからないだけでも知れませんが、人間の表現量に比べれば、彼らの表現量はものすごく少ない気がする。悲しいほど少ない。われわれ人間はものすごくたくさんさんの表現をすることができる。そういう人間に生まれた幸せみたいなことを思つて、あの水族館で気が落ち着いていったのかなと思うのです。

この地球上で笑うのは人間だけだといいますが、これもわかりません。植物だって笑っているのかもわかりません。カラスだって蛇だって笑っているのかもわからない。ただ人間がわからない

いだけです。金魚の目は赤外線、紫外線の世界がみえると教えてくれる人がいました。ですから、夜でも人間にはみえない世界がちゃんとみえたりするわけです。

人間が偉そうに威張っています、ひょっとしたら彼らのほうが、ぼくたちのもっていない世界がたくさんあって、かわいそうだなと思うぼくのほうが、かわいそうなのかもしれません。しかし、すくなくとも見た目では、人間のほうが何万倍の表現力をもって生きています。ぼくはその幸運を思ったのです。

動物園も気が落ち着きましたね。水族館と同じような理由で、すごく気が落ち着いた。こうして生活していましたが、夜になると、やはり気が沈みます。

早坂は心筋梗塞でガンだというのがなんとなく漏れてしまったらしい。それは急にお見舞いがふえることでわかります。ふつう来そうにない人まできたりする。東京新聞だけはちゃんと死亡記事を予定原稿で書いてくれたそうですが、あとになってみせろと頼みましたが、見せてくれなかったですね。

ま、昼間はそうやって人がきているからいいのですが、夜ひとりになると、フツと落ち込む感じになります。ちょうど向田邦子さんが死んだ翌年でした。彼女とは仲のいい友達だったものですから、夜眠っていると、向田さんが出てくるわけです。「早くいらっしゃい」なんていうことをいっている。

「こちらは締切りがなくて楽よ」……。あの人もぼくぐらい原稿が遅かったものですから、いつも締切りに追われていた。深夜のテレビ局で、向こうの机で書いている人がいるなと思うと、たいてい彼女だった。そういうことがあったせいかな、「こっちは、楽よ」なんて招いている。目がさめて、ああ、彼女が呼びにきているようじゃ本当にだめなんだな。でもあちらは楽だといっているから、あちらはいい所なのかなあと、わりとのんきには考えますが、やはり、死ぬということが怖い。というより、その時、ぼくは五〇歳でしたから、一言でいえば無念、まだいろいろな仕事や表現活動をしたいのに、五〇歳ではちょっと早すぎるではないか、というのが実感でした。

死の受容

お見舞いでいろいろなものをもってきてくれます。本をもってきてくれたりします。そのなかに『死の瞬間』という本がありました。恐ろしい本をもってくる人がいるものです。人が死にそうになっているのに「死の瞬間」はないだろうと思って、ほんとに腹が立ちましたから、いちばん奥の見えないところへ突っこんでしまいました。

ああいうときは縁起をかつぐものです。病棟が四階でしたですから、いやな階数だなと思うぐらいです。それが、こともあろうに『死の瞬間』……。きれいな花をもってくる人がいた。なにか名札がついているので、見ると「シネリア」と書いてある。まあなんといういまましい花



をもってくるのだろう……。しかし、あれはサイネリアですね。シネラリアでもいいのでしょうか。病人や、死にかけている人間は、そういうのが意外にこたえるのです。おまえは早く死ねといわれているような気がする。

そういう状況に置かれているうちに、だんだん、ぼくは死がどんなものかわからないから、怖くて不安なのではないかと思いだしたのです。いわば海図のない海へはいつていくような不安です。だから、死という海の海図がわかったら、もっと楽な気になるのではないかなと思いました。しかし、そんな海図はありません。ぼくはほんとに信仰を持つておけばよかったなと思ったのですが、ぼくも大多数の日本人のように、頼りない仏教徒です。日本人は仏教徒というけれども、お葬式のときぐらいしか仏教徒にはならなくて、あとはほとんど無信仰。だから死についてもいっこうに定まった考え、感じ方を持たない。

空海が死のことに決まっています。あの人は、自分で三月二一日に死ぬといっています。死の予告日に死ぬように、五穀断ちからはじめて、最後に水を断って、いったとおりの日に死ぬ。すごいことを昔のお坊さんはやるのですね。即身成仏そくしんじょうぶつといいます。

つまり素晴らしい意志の力で死を自分でコントロールするわけです。高野山へ行ったらわかりますが、御影堂みえどうというのがあります。あの建物の中でいよいよ空海の死ぬ日がやってきた。今から千百五十年以上も昔のことです。まわりはお弟子たちが集まって読経をあげています。空海は、

ほんとうにもう死ぬという直前になっている。

そこで弟子たちが空海にお言葉をくださいと、最後の言葉をねだるのです。その時にいった空海さんの言葉が、「生まれ生まれ生まれ生まれる前に冥^{くも}く、死んで死んで死んで死んで後^{くち}も昏^{くら}し」でした。

いってみれば空海はそのとき、鼻がくつつくほどの近くで死を見ているわけです。いちばん死に接近した人のいった言葉だから、その「死」の光景は確かなものでしょう。

死んだ後はくらいといっているのです。また生まれる前もくらい。永遠に後ろも前もくらいんだよ、とおっしゃっている。この、わずかな生きているあいだだけがポーッと明るい。映像的にいえばそういうことなのでしょう。

いちばん死に大接近した空海が報告してくれているから、死の感じはわかりましたが、それでもまだ死というのがよくわからない。

そこで、『死の瞬間』の本が気になってきたのです。『死の瞬間』というのは上下の二冊の本です。いっぱい「死」について書いてありそうだな、と思って、奥から引っぱりだしてみたのです。開いてみますと、それはアメリカのエリザベス・ロスさんという女医さんの本です。医学書なのです。この人はシカゴのキリスト教関係の病院でたくさん¹の末期ガンの患者さんたちを診療している女医さんで、たくさんの末期ガン、いわゆる死を宣告された人間をみつめての症例をまと